

海が育んだ鹿児島島の歴史

⑤ 外圧と幕末動乱

■黒船の脅威

嘉永六（二八五三年）、ペリー提督率いるアメリカ海軍の軍艦四隻が浦賀に姿を現した。黒船来航である。

ペリーの乗船サスケハナ号は、排水量三千八百トン余で、四百二十馬力の蒸気機関、鉄製砲九門を搭載していた。日本の軍艦は百トンに満たない。江戸初期に建造されたものばかりで、蒸気機関も大砲も装備していなかった。

軍事力の差をまざまざと見せつけられ、幕府は鎖国を続けることが困難と判断して開国に踏み切った。たった四隻の軍艦が日本の歴史を変えたのである。その十年ほど前、薩摩藩はすでに通商を求めるイギリス・フランスなど西欧列強の激しい外圧にさら

されていた。そしてペリーが来航した頃には、西欧列強の進出に対抗すべく動き始めていたのである。

■日本を強く豊かに

天保十三（一八四二年）、薩摩藩主島津斉興は洋式砲術を採用し、弘化三（二八四六）年には上町向築地（現鹿児島市浜町・石橋記念公園一帯）に洋式砲を製造する鑄製方を、鴨池に理化学薬品を研究・製造する中村製薬館を創設した。以後、薩摩藩は長崎防衛を担っていた佐賀藩とともに、日本の近代化・工業化をリードしていくことになる。

特に、嘉永四（一八五二）年に藩主に就任した島津斉彬は、幕府や藩という枠では西欧列強に対抗できない。日本が一丸となって強く豊かな国造

りを目指すべきだと考えていた。

そしてこの考えを実現させるため、中央では公武合体を推進して日本を一体化させようとし、国もと薩摩では磯（現鹿児島市吉野町）に集成館という工場群を築き、ここを中核に製鉄・造船・紡績・ガラス・ガス・写真・印刷・医療・福祉などさまざまな事業に取り組んだ。いわゆる集成館事業である。

■薩英戦争

安政五（一八五八）年、斉彬は急死した。斉彬という指導者を失って、薩摩藩の近代化・工業化事業は頓挫。藩内でも下級武士を中心に攘夷（外国人を追い払うこと）を唱える者たちが勢いを増していた。

この状況を一変させたのが文久三

尚古集成館 副館長

まつお 松尾 千歳 ちとし

【プロフィール】

昭和58年鹿児島大学卒。同年、尚古集成館に入館し、学芸係長・文化財課長を経て、平成18年から副館長。島津家や薩摩藩の歴史・文化を研究。福岡県出身。

（二八六三年）の薩英戦争である。前年に生麦村（現横浜市鶴見区生麦）で発生した薩摩藩士によるイギリス人殺傷事件（生麦事件）の犯人処刑・賠償金の支払いを求めて、七隻のイギリス軍艦が鹿児島に来航した。薩摩藩はこれを拒否し、イギリス艦隊が薩摩藩の汽船を拿捕したことをきっかけに、両者は激しい砲撃戦を交えた。

戦闘ではイギリス側の最新鋭のアームストロング砲が威力を発揮し、集成館や城下町が炎上、砲台も壊滅的状况に陥った。ただ薩摩側の砲台も善戦し、イギリス側に薩摩側を上回る人的被害を与えた。

この戦争で藩の状況は一変した。藩内の攘夷論者も考えを改め、近代化・工業化を推進した斉彬の業績が再認

識された。薩摩藩は一丸となって近代化・工業化に邁進^{まいしん}。イギリスとの関係も改善され、紡績機械などの輸入や留学生の派遣も行われた。逆に幕府との関係は悪化し、幕府を中核とし

た新しい国造りを断念し、薩摩藩は討幕に踏み切ったのである。平成二十五(二〇一三)年は、時代の変換点となったこの薩英戦争から百五十年の節目の年である。



石橋記念公園内の祇園之洲砲台跡



薩英戦争絵巻(尚古集成館蔵)

奮戦する祇園之洲砲台



薩英戦争絵巻(尚古集成館蔵)

画面中央に浮かぶイギリス艦隊を攻撃する薩摩藩の砲台。手前左より祇園之洲砲台・新波止砲台・弁天波止砲台・南波止砲台(臨時砲台)。桜島沖では、薩摩藩の汽船が炎上している。